

授業科目の内容の再検討とそれに対応する再評価結果の分析

社会科教育専修・矢澤知行

1. 授業の概要

本授業は，人間社会デザインコースの選択必修科目にあたり，日本を含めたアジアの歴史を念頭に置きながら戦争と平和の問題について論じる講義形式の授業である。今年度の受講登録者は計32名，その所属別，学年別内訳は次の通りである。

・所属別

人間社会デザインコース・・・28名
学校教育・社会科教育・・・・・・2名
国際理解教育コース・・・・・・1名
生活環境コース・・・・・・1名

・学年別

2年生・・・・・・17名
3年生・・・・・・12名
4年生・・・・・・3名

本授業では，受講生の到達目標として，積極的平和の概念についての知識と理解を深め，あらゆる種類の暴力（直接的／構造的／文化的暴力）を不在・低減させるための方策について自らの考えを述べることができるという点を掲げている。これは，「自分の生き方を社会のあり方と結びつけてデザイン（考案・計画）することができる。（思考・判断）」という人間社会デザインコースのディプロマシーの項目を念頭に置いた目標であり，授業の内容もこの点に沿って構成している。

この授業科目については，科目新設当初の2009年度に授業評価・授業研究報告を行った経緯があり，本報告はそれに続く二度目の授業評価という位置づけになる。以下，前回の報告との比較に留意しながら述べていきたい。

まず，2009年度の授業構成は，平和学に関する基礎的な理論について，ヨハン・ガルトウングの学説を中心に据えながら概観し，現代世界の戦争と平和をめぐる状況を俯瞰したうえで，映画作品4点を取りあげ，それらを視聴したうえで歴史的背景などについて論ずるものであった。前回の報告では，“映画だけでなく，写真や美術，文学，ドキュメンタ

リー，手記など，多様な資料を提示することによって，本講義の内容をさらに深化させることができるものとする”と述べ，授業内容を多様化させることを課題として掲げた。そこで本年度の授業では，視聴する映画作品を1点（『ノー・マンズ・ランド』2001年，ボスニア・ヘルツェゴヴィナ他）のみに絞る代わりに，次に示すような多彩な内容を盛り込んだ。

- ・ 課題図書（伊藤明彦『未来からの遺言』青木書店，1980年。のち岩波現代文庫，2012年として復刊）の講読
- ・ セミナー（2014年1月25日，上掲書の解説を執筆した今野日出晴氏を講師として招聘）の受講とミニシンポジウムへの参加
- ・ 関連論文（ダグラス・ラミス「積極的平和？」（渡辺治他編『平和秩序形成の課題』〈講座戦争と現代5〉大月書店，2004年所収）の講読

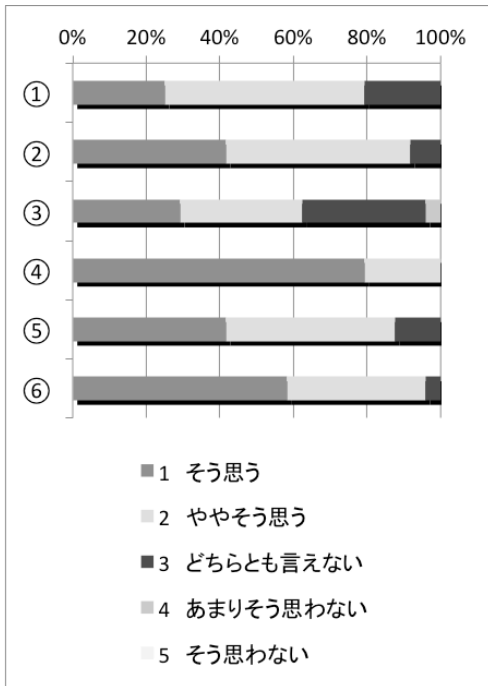
2. アンケート結果とその分析

本報告を作成するにあたり，「授業改善のためのアンケート」を実施した。全15回の授業の第13回にあたる2014年2月3日にアンケート用紙を配布し，同日の授業時間内に回収した。アンケートの質問項目は下に示す6件であり，いずれも5段階評価による調査を行った。また，授業に対する感想や具体的な要望を記入するための自由記述欄も設けた。

- ①【あなたの意欲】この授業に積極的に取り組んだ。
- ②【関心・興味】この授業で取り上げられた事柄について，関心・興味がわいた。
- ③【有用性】授業内容は自分の将来の進路，人生にとって役立つと思う。
- ④【教員の意欲・熱意】教員の授業に対する意欲・熱意を感じた。
- ⑤【満足度】本授業は全体として満足のいくものだった。

⑥【おすすめ度】本授業の受講を他の学生や後輩にすすめた。

アンケート結果を集計・整理したところ、次のグラフに示す通りになった。



ほとんどの項目において、「1. 思う」「2. やや思う」との回答が大半を占め、おおむね良好な結果が得られた。とりわけ項目④【教員の意欲・熱意】は満足いく結果となった。しかし、項目③【有用性】については、「3. どちらとも言えない」と「4. あまりそう思わない」が一定数を占めていた。前回の調査時には、同項目において「1. 思う」が60%を占めていたから、かなり後退したことになる。

アンケートの自由記述では、授業の手法や形式について、“導入の仕方とまとめ方がとても簡潔で聞きやすかった”と肯定的な評価があった一方で、“パワーポイントやレジюмеをもっと活用していただくと、より学生も引き込まれるし、内容ももっと頭の中に入ってくるのではないだろうか”との助言もあった。今回は、映画の視聴、文献の講読、セミナーの受講に際して、それぞれワークシートを配布し、各々の受講生が、細部の留意点や、事後の議論につながるポイントについてメモを取れるよう工夫したが、授業そのものは基本的には板書をしながら進行していった。今後は、パワーポイントやレジюмеの有用性も

念頭に置いた授業の組み立ても検討する必要があるだろう。

また、映画だけでなく課題図書の講読やそれに関わるセミナーの開催などを盛り込んだ点については、“映画もミニシンポジウムも本も大変心に残るものとなりました。”とのコメントが得られた。セミナー・ミニシンポジウムの受講後に課したワークシートの記述内容からも、ほぼ授業者の狙い通りの成果が得られたことを実感できた。

授業の目的や到達目標に関しては、“平和に対しての考え方が変わる。普通を普通と思うか、思わないか、考えさせられるものは多かった”，“真の平和とは何か、自分の中でもう少し考えたいと思った”，“（講義のタイトルを見て）難しそうだと思っていましたが、難解なことというよりは普遍的なことがらについて考えるきっかけを与えてくれる授業であったと思います”といったコメントを得ることができた。これらは、コースのディプロマシー（思考・判断）と関わるものであり、一連の授業を通じて学生たちの思考・思索を促すことができたという点で一定の成果を得られたように思う。ただ、先述の通り、ディプロマポリシーと密接に関わるアンケート項目③についていえば、結果は必ずしも芳しくなかった。今後は、本授業を受講する意味を、学生たち自身の将来設計と結びつける形で具体的に示す必要があると考えられる。

3. 総括

以上、本報告では、授業科目「アジア史における戦争と平和」の内容の再検討と、それに対応する再評価結果の分析を行った。そして、授業の手法や形式の見直しに加え、ディプロマポリシーとの関連づけの強化など、さらなる課題が浮かび上がってきた。このほか、受講生からの意見を引き出すなど、双方向的な授業のあり方についても依然として課題が残されている。一層の工夫を試みていきたい。